

令和7年度 第3回 山形県幼児教育推進連携協議会〔議事録概要〕

期日：令和8年1月19日（月）

場所：山形県教育センター 講堂
（ハイブリッド開催）

1 開会

2 県教育委員会挨拶

3 協議

○ 説明「山形県幼児教育推進ビジョン（案）」について

◆質疑応答

<委員>

- ・幼児教育センターは、県教育センター内に設置ということか、お伺いしたい。

<事務局>

- ・義務教育課内への設置を想定している。

<委員>

- ・義務教育課内への設置ということは、専任者を置く、あるいは兼任ということで運営していくのか。

<事務局>

- ・現時点では、基本は兼任という形で想定をしている。

<委員>

- ・兼任で進めるということだが、十分な体制であるという考えでよろしいか。

<事務局>

- ・まずは幼児教育センターを立ち上げ、アドバイザーの派遣等に早急に着手していくことを想定している。初年度は、職員の中で業務を充てる形を考えている。

<委員>

- ・せっかくの機会なので、より充実した形での運営を望みたい。

<委員>

- ・来年度の幼児教育センター立ち上げに向けて、早急にビジョンをお示しいただ

き感謝している。幼児教育推進ビジョンの目指すべき姿に掲げた「一人ひとりのよさや可能性を伸ばす質の高い幼児教育の実現」について、ここに「円滑な接続」という文言を入れてはどうか。次期学習指導要領の論点整理の中に「好きを育み、得意を伸ばす」というキーワードがある。これは、幼小にとどまらず、中高も貫くキーワードである。幼児教育から小学校教育への接続、さらにそれ以降の教育への接続ということを考えていくべきである。このような視野を是非本ビジョンの中に入れ込んでほしい。

<委員>

- ・令和8年度に設置というのが嬉しかった。大変な事業であるため、いろいろ検討は必要だと思うが、まずは設置してそこから内容を固めていくということを理解した。
- ・大事なところは、やはり円滑な接続であると考えている。いろいろな研修会を通して、小学校の先生とのギャップをいつも感じている。幼稚園で実際に実習をしていかれた小学校の先生は、幼児期の子どもたちとの触れ合いを通して、子ども理解をさらに深められた様子だった。小学校の先生たちがより一層接続への意識を高められるよう、幼児教育センターにはがんばっていただきたい。接続への取組みについては、地域によってだいぶ差があると感じている。地域によって課題は様々あると思うが、アドバイザーの方に入っただき、地域ごとにアドバイスをしていただくのが一番重要であると考えている。
- ・新しい研修会への参加は、今なかなか難しいところがある。研修会を新たに設けるということではなく、研修会の助言者や講師としてアドバイザーの方に入っただき、様々な情報を発信してほしいと期待している。

<委員>

- ・令和8年度から幼児教育センターを設置ということで大変感謝している。
- ・幼児期の教育について0歳児から小学校までの時期ということで記載していただいた。幼児教育というと、3歳児以上に論点がいってしまいがちだが、0歳児からと記載していただいたことに感謝したい。生まれた時から育ちに対する教育というものは成り立っている。小学校、中学校、高校と積み重なっていくということをこれまでも話してきた。引き続き、幼児期の部分に関して力を入れていただければと思う。
- ・県一斉での研修会の開催については、センター設置後に検討していただき、山形県の子どもたちを育てる機会としていただきたい。

<委員>

- ・1点目、「一人ひとりのよさや可能性を伸ばす質の高い幼児教育の実現」とあるが、伸ばすという言い回しが、保育者側から見ているといった課題にもつな

がる表現ではないかと考える。子どもたちは、生活や遊びの中で自ら学び、自ら伸びる。保育者側が伸ばさなければならないといった発想にならないようにしたい。第7次山形県教育振興計画に「一人ひとりが自分らしく可能性にチャレンジできる学びを実現する」とある。保育者が伸ばさなければならないという誤解を与えないようにしたい。

- ・2点目、幼児教育センターの設置については義務教育課の中に設置されるということだったが、予算の関係など様々あるかもしれないが、せっかく幼児教育センターができるこの機会に、全ての幼児教育施設の保育者を対象とした合同の研修会をぜひ行っていただきたい。山形県の幼児教育の方向性を共有し、弾みをつける機会をもってほしい。

<委員>

- ・本ビジョンの内容は、これから担うべき方向性の部分において網羅されている部分がたくさんあり、しっかりとつくっていただいていると感じた。
- ・ビジョンをつくって、いかに実行していくかという点がポイントとなる。実際にこのビジョンをどうやって動かしていくのか、浸透させていくのかという部分について、現時点で具体的に示せることにも触れていただきたい。
- ・幼児教育と小学校教育というような部分にスポットを当てたビジョンであるわけだが、幼児教育推進ビジョンの考え方の根本は、今の日本の教育体系の基本にもつながってくると考えている。我々の世界では、こども大綱の制定やこども基本法の制定がすごく大事になっており、そこでは0歳を起点として18歳までという捉え方が示されている。0歳から18歳の枠組みの中で、特に今回この幼児教育について推進していくビジョンであるという捉え方を示していただきたい。「幼児期の終わりまでに育てたい姿」があるが、この時期にとどまらず、その前の段階から含めた姿というようなところの捉え方で考えたい。どのようにして幼児期の終わりの姿が育っていくかという、プロセスの部分に重要なポイントがあると考えている。そういう部分も表現していただけるといい。例えば、福井県が作成したものに、10の姿を起点に0歳から7歳以降についてのプロセスをまとめた表がある。こういったプロセスを知ることが、小学校との接続に生かされると考える。保育の世界からすると、小学校低学年から中学年、高学年に進んでいくときに、どう進んでいくのかという部分が分からないところもある。プロセスについて、研修等を通して互いに理解していくことが大切である。

<委員>

- ・本ビジョンが、幼児期の発達の特性を踏まえ、遊びを通した学びを中核にした方向性を明確に示していることについて、評価したい。特に、幼児教育と小学校教育をつなぐ架け橋の重要性について記載されている点は、国公立園とし

て持っている課題意識と一致している。県内の幼児教育の充実に向けた大きな第一歩になると期待している。多様な幼児教育施設がある中で、施設の種類に関わらず質の高い幼児教育を提供するには、幼児教育センターの設置及びアドバイザー、コーディネーターの人材配置は必要である。ビジョン案には、今までのような縦割りの行政の問題を解消し、各関係部局などが連携のもと、幼児教育の資質向上のために推進していくということが明確に示されている。ビジョン案を実施していくことに、大変意義深いものがあるなと感じている。

- ・ 1つ目、現場では、教職員の人材確保と研修時間の確保に課題がある。専門性の向上は不可欠だが、実際、研修参加が難しい人員配置上の課題がある。園にアドバイザーが訪問してアドバイスをいただくということだったが、研修に参加するということにも大きな意味があると思う。研修参加の支援体制、オンライン型の活用なども含め、今後ご検討いただきたい。
- ・ 2つ目、幼小連携の継続的な仕組みづくりをお願いしたい。幼稚園側ばかりが小学校側に投げかけてもなかなか難しいところがある。連携のための時間確保や方法などは、地域によってかなりばらつきがあると感じている。幼保小担当者の位置づけや協議の場の継続化など、連携していける仕組みができれば、一層進むのではないかと感じている。
- ・ 3つ目、特別な配慮を必要とする子どもの支援体制に期待したい。早期支援につながる体制、専門職の方と連携体制を期待している。
- ・ 4つ目、保護者、地域への理解が広がるビジョンであってほしい。ビジョンの中にも家庭との連携の強化とあるが、幼児教育の遊びや学びについて、保護者の方に理解してもらうための資料の整備や後方支援など、お力添えをいただきたい。

<委員>

- ・ 第2回の本協議会は諸用により欠席させていただいたが、前回の内容については議事録を拝読させていただいた。本日お示しいただいた幼児教育推進ビジョンのような形までつくっていただいたことに、敬服させていただく。
- ・ お示しいただいた内容に関しては、大まか賛同している。細かい部分について皆さんと一緒に考えられればと思う。まず、概要案に「好事例の創出と波及」とある。創出とは、何もない状態からつくり出すという意味となる。つまり、好事例は本県にないということになってしまう。好事例はたくさんあるので、この言葉は吟味する必要があると考える。例えば、発見する、抽出するなど、既にある事例から好事例を見出し価値付けするという方向の言葉に変えた方がよいと考える。また、波及とは波のように徐々にゆっくりと広がるという意味である。ビジョンを示すということは、なるべく早く情報を共有して、そこから新しいフェーズに、という意味が願いとしてあると感じている。波及という波のような遅さよりは、速さであれば伝播、質を求めるなら普及、つまりすべ

てのものに影響を与えていくような言葉を検討してほしい。

- ・続いて、ビジョン案の2ページ目に、全国における小学校関係者の方の課題が示されているところについて述べたい。ここには、小学校関係者にとっては幼児期のことがわかりにくいといった意味が書いてあるが、それ以前に、現在の小学校の学習指導要領の総則には、「学校段階等間の接続を図る」ということが既に明記されている。つまり、小学校では、小学校の前の段階、幼稚園、保育園、こども園との接続を図ること、当然、小学校以降との接続も図るが、これらに関して、総則に示されている以上、教育課程として整理することが求められているということである。よって、学校段階等間を接続するための教育が十分に生じておらず、機能していないといったことを明記するべきではないかと考える。曖昧な表記では誤解を招くとも考える。
- ・続いて7ページ目に「幼保小の連携の充実」とあり、相互に保育や授業を参観しとあるが、基本的にはもう既に流通している架け橋のプログラムを動かすことを意味しているのではないかと思う。原案では、「意見交換等の機会を通しながらその理解を深めていく」というところでとどまってしまっている。本来的には、意見交換等の機会を通すことによる架け橋プログラムを運用していくと明記すべきであり、それによって相互理解を深めていくはずであるとも考える。そう示すことによって、小学校側に対して、接続に向けた体制づくりの認識を明確に示すビジョンになると考える。

<委員>

- ・山形県のビジョンであるが、山形を秋田に変えようが岩手に変えようが使えると思った。地域性が広くそれぞれ違うため、大枠で定めなければならないということはある。だからこそ、これを具現化していくときに、山形らしさについて考えていく必要があると感じた。その上で、他の委員からご発言があったように、子どもは自ら育つ存在という表記にすることは欠かせない。また、特別支援の相談体制について、幼児教育センターが義務教育課に位置づくというところで、このような書き方にとどまってしまおうとは思いますが、困難を抱えている特性の強い子どもが、その特性だけで困っているということは実は少ない気がしている。今でいうところの保育ソーシャルワーク的な観点で言えば、各家庭の事情なども含めて連携していく必要があると、どこかに示せないかと感じている。今後、山形らしさや福祉部局との連携などが、具体化される際に出てきてほしいと期待している。

<委員>

- ・ビジョンをどの程度の範囲まで効力を持たせられるかということが重要であるとも考える。幼稚園、保育園、認定こども園の先生方に、研修等を自分たちのやるべきこととして認識してもらえるか、ということだけでなく、幼児教育と

という言葉が入っていると小学校の先生たちが自分たちもこれをやらなくてはならないこととして認識をしてくれないのではないか、という懸念がある。過去に、大学教員の資質向上に向けた様々な取組みが行われた際、教員の意識を変えることが一番難しいと言われたことがある。「自分はちゃんとした教育をやっている」と、どうしても頑なになって、自分のやり方を変えられない層が一定数居る。そこを変えようとするのではなく、意欲や向上心のある教員を中心に、少しずつ意識が変わっていくことを目指して進め、次第に大学教員の意識が全体的に変わっていくことを目指すべきと。保育園、幼稚園、小学校の先生でも同じようなことが起こる可能性がある。仕事は現時点で一生懸命やっている、これ以上何を新しくするのか、何を取り入れるのかなどという意識である。そうした部分ではビジョンを進める際に、ある程度の強制力や上からの取り組む課題としての圧力というのは必要とを感じる。

- ・ビジョンを進めていくには、点検や評価のシステムを考える必要がある。幼児教育推進ビジョン（幼児教育センター）においても、取組みや事業についての自己点検と第三者点検の双方のシステムがあった方がいい。第三者評価により、自分の取組みに対して共感を得られるよさもある。互いの取組みを評価しつつ、他のやり方の情報も得つつ進めていけるとよい。幼児教育センターについても、課題を次につなぐような仕組みをつくっていくことを大事にしてほしい。

<委員>

- ・幼児教育センターの来年度設置ということについて、お礼を申し上げたい。県内の幼児教育推進の核となって、様々な支援をしていただければ大変ありがたい。市町村における「計画的な幼児教育の推進」への支援について、市町村の要請に応じて、幼児教育アドバイザー等の派遣や市町村主催の研修の講師を務めていただける点についても大変ありがたい。支援体制が整い、幼児教育と小学校教育の接続の質の向上につながるということで、本ビジョン案については特に意見はないと、本市の教育委員会の担当者とも確認をした。
- ・カリキュラム開発について、具体的にはどういったことを想定しているのかお聞きしたい。市町村の「計画的な幼児教育の推進」に、それぞれの実情に応じて幼児教育の推進に関する計画を策定とあるが、どういった計画を想定しているのか、お伺いしたい。また、市町村の「児童福祉部局と教育委員会との連携」のところに連携体制を明確にするとあるが、具体的にどういったことを想定しているのかお聞きしたい。

<事務局>

- ・ご指摘の通り、各市町村、幼児教育施設、小学校において、架け橋の取組みや連携体制は、様々な状況があると捉えている。すでに、架け橋の取組みを具体

的に進めている自治体もあれば、何から始めたらよいかと悩んでいる自治体もあると聞いている。まずは、各地区や市町村の状況の情報収集を改めて行いながら、こういった形で支援をしていくかを整理する必要があると考えている。県教育委員会では、幼児教育や架け橋に関する様々な資料を既に提供させていただいている。センター設置後、資料の一層の活用や改編等についてセンターの中で検討していきたい。カリキュラムの開発会議で想定しているメンバーは、当課と各教育事務所の幼児教育担当者、そこに外部有識者を加えながら本県としてカリキュラム開発というようなことに着手できないかと考えている。各市町村での計画についても、それぞれの市町村で今どのような状況にあるのかについての情報収集をしながら検討していきたい。

<委員>

- ・ビジョンについては全体的わかりやすくできていると感じた。
- ・1点目、保育者等の幼児教育の専門性や資質の向上ということで、可能ならば山形県4地区でそれぞれ研修を開催していただきながら、保育所、幼稚園、認定こども園の先生方が直接学ぶ、あるいはオンラインで参加することができるような環境をご検討いただければ大変ありがたい。
- ・2点目、幼保小の連携の充実について、幼稚園の職員から「以前より連携がしづらくなってきた」という声を聞くことがある。小学校でも働き方改革等があり、会議や行事の見直しが進み、幼稚園や保育所等との連携が難しくなっている現状がある。本ビジョンを通して、小学校側へのアプローチにも力を入れていただければと期待している。

<会長>

- ・その他、時間の限り自由にご発言いただきたい。

<委員>

- ・今年度、県内の15の幼児教育施設と関わった。それから3つの教育事務所で、幼保小の連携に関わる研修会の方の講師を務めさせていただいた。総じて言うと、県内で私が関わっている幼児教育施設の保育は非常に豊かで、優れた保育をしていると感じている。15のうち10は、小学校との接続に関わる、いわゆる架け橋プログラムを動かすことについてもお手伝いさせてもらっているが、その10のうち半分はうまくいかない。そのほとんどの理由が、小学校の方がうまく運用できないということである。教育事務所開催の研修会では、参加者のほとんどは幼児教育施設の方々と、小学校の参加は少ない。つまり、小学校側に対して、いかにこの幼児教育推進のビジョンを理解してもらい、理解してもらった先に動かしていけるよう、価値を認識していただく必要があると考える。5つの学校は、非常にうまく機能していて、その成果がどこで出て

くるかという、中学年、高学年の子どもたちの姿の質が全然異なってくる。いわゆる教科や探究、総合的な学習の時間などで現れる子どもの姿の質が、全然質が異なってくる。小学校以降の教育のことを考えるためにも、就学前の幼児期の優れた実践をいかに小学校以降の教育に関わっている人たちに理解してもらい、力強く進めていけるかということが、幼児教育推進ビジョンを進める上で最も大事な要素であると考えている。

<委員>

- ・小学校側に理解いただくということが肝になる。幼児教育側も小学校の理解を一層深める必要がある。ビジョンを進めていく上で、さらに一步踏み出す取り組みも必要である。保育参観をして終わってしまう、協議会に参加する方に偏りがあるなど、そこで止まってしまっただけでは本当の意味での幼保小連携とは言えない。動かしていくには負荷もかかるが、これからはビジョンをどう動かしていくかに力点を置いて進めていってほしい。

<委員>

- ・校長会で幼児教育についてお話をさせていただいたことがある。校長先生に理解していただけると、大変動きが早く、公立小学校の低学年の先生が保育を見たいと、すぐに本園に来園し、その後、小学校でご自身の実践にいかしてくださったようだ。管理職の先生を対象とした研修会に含めていただくとよいのではないか。

<会長>

- ・幼児教育センターの設置については、県や各地区の校長会でもしっかりとピアーアールをしながら、現場の理解を得て取り組む必要がある。
- ・最後に、本協議会の副会長からご発言いただきたい。

<副会長>

- ・3回にわたり、本協議会でそれぞれの委員の皆様から、それぞれのお立場で様々なご意見をいただいていた。いずれも教育の新たな取り組みに対する期待の流れではないかと捉えている。具体的な取り組みについては、次年度以降、本格的な取り組みが進められることになるが、各主体だけで進められるものではないと捉えている。それぞれの主体が連携しながら進めていくことが大切である。県全体として、幼児教育の新しい取り組みを円滑に進めていくということが一番重要であると考えている。

<会長>

- ・本日はそれぞれのお立場から、貴重なご意見をいただいた。いただいたご意見

をもとに、幼児教育推進ビジョンの最終案の取りまとめをしていくこととなる。最終案をもとに、パブリック・コメントを実施していく。その後の、修正、取りまとめについては私の方の一任していただきたいが、よろしいか。

- ・ご一任いただいたということで、責任をもって進めていく。最終的に取りまとめ次第、皆様にお送りしたいと考えている。本日は最後の協議会となる。委員の皆様には、熱心ご議論いただき、厚く感謝申し上げます。ビジョンの実行性をより確かなものにしていくためには皆様からのご協力が必要である。今後も皆様からのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

4 諸連絡

5 閉会